

村川堅固・堅太郎がのこしたもの

村川夏子

本稿は、二〇〇七年十二月一六日に、熊本近代文学館において開催された特別講演会「中島広足と広足資料を伝えてきた人々」における講演を文字化したものである。ただし、本誌収録に際して一部の写真を入れ替え、文面を改めた箇所がある。

今日は「村川堅固・堅太郎がのこしたもの」と題し、熊本の国文学者である中島広足の資料がなぜ東京の村川家に残って今日まで伝えられてきたかについて、私は、堅固・堅太郎の次の世代、継承した者ということになりますので、その立場から見えることをお話しいたします。しかし私は国文学とも歴史研究とも無縁の人間で、広足資料を読むことができないことも付け加えさせていただきます。

もう五年ほど前になるでしょうか、村川家の資料が熊本市史編纂の資料としてマイクロフィルム化されるために荷造りされて出て行った時のことです。私は我が家に中島

広足の資料、特に江戸期の刊本があることを知っていましたし、その刊本が入った箱の中に、本だけではなく、クルクルと巻かれたり折り畳まれた和紙の束があることも知っていました。それらは反故のようにも思われましたが、折角の機会だから積み込んであげようくらいのつもりで送り出したのでした。しかし調査が終わった後、それらは広足自身の下書きで、通常は残ることが少ない、若書きや草稿があることが村川家資料の特色といえると思いましたので、私としては驚くとともに、全てマイクロフィルム化していただいで良かったとしみじみ思っているところです。

さて「村川堅固・堅太郎がのこしたもの」についてお話しを進めてまいります。堅固から堅太郎に受け継がれ、堅太郎が平成三年に他界した際に残したもの、それも誰の目にも明らかなものに三箇所土地がありました。一つは現在、私どもが住んでいる文京区目白台の家（庭、家、モノ）

で、その他に二箇所の別荘地がありました。一つは千葉県我孫子市、もう一つは神奈川県藤沢市鶴沼、その二箇所で。その三箇所の地はいずれも、堅固、堅太郎の考えを反映して樹木が多く、それぞれの地域において際立って緑の濃い一角をなしているという特色がありました。堅太郎は自分の死後もそれら緑の多い土地がそのまま保存されることを望んでいましたので、私たち遺族は相続税の物納の傍ら、自治体にこの願いを伝えました。紆余曲折はありますが、両自治体、当時の大蔵省とも理解を示され、現在、我孫子の方は、建物を残して我孫子市指定文化財「旧村川別荘」として、鶴沼の方は建物の傷みが激しく解体したため土地だけが「鶴沼松が岡公園」として残され、どちらも市民の方々に大切にしています。先程のお話にもありましたように、我孫子の方では堅太郎生誕百年を記してこの四月に講演会が開かれました。

さて今までは堅固・堅太郎が残したものを「形」という面からお話しました。次に「時間」という面からお話しますと、堅固・堅太郎が一生の間に自分の働きで積み上げたもの、例えば建てた家などですが、そうしたものとともに、堅固が前の世代から引き継いだもの、この二つがあります。書類類に関していえば、その両方にまたがることになるわけですが、村川家資料にはことさらに古いものは無く、元

禄頃のものも幾らかはありますが一八〇〇年以降のものが多く、むしろ主なのは堅固・堅太郎の生涯を反映して、明治以降の日本の近代化の足取りを辿る性質の資料群です。前の世代からの継承である広足資料は異色の方と言えます

が、異色の部分があったことをきっかけに、堅固・堅太郎が残した全体像を見ていただけようになりました。堅固は広足資料を、堅固の義父、すなわち堅固の妻ふさの父である武田寧から受け継ぎました。ですから今日は堅固・堅太郎の生涯に合わせ、武田寧にも目配りしながらお話していきます。この三人を時系列に並べるならば武田寧が幕末の生まれで一番古いのですが、今日は堅固からご説明します。

村川堅固は明治八年に熊本市葉園町で生まれました。葉園町はお城の北東に当たります。第五高等中学校から東京帝国大学に進学して西洋古代史を学び、ドイツを中心としたヨーロッパに三年留学したのち、帰国して東京帝国大学で教鞭をとりました。私生活においては、明治四十四年に文京区目白台、かつては雑司ヶ谷と言いましたが、目白台に本宅を建てたのを皮切りに、その後の十七年間に二箇所の別荘地に三軒の家を建てました。堅固は常々、「衣食住」という言葉は間違っている。「住」すなわち住むことが根本だ。家はある程度大きく、そうして大きな木があることが大切だ」と言っていたそうで、自ら「住食衣主義」と称し、

これを家族に話すとともにその論をどこかで公にしたこともあったそうです。といつてもどこでそれを公にしたのか、それはわかっていません。

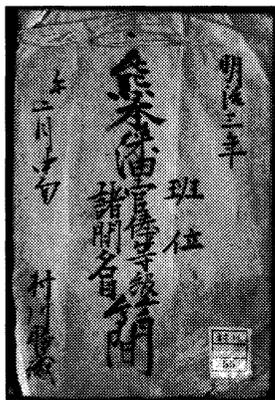
次に堅固の義父の武田寧、この武田寧が中島広足の孫です。広足の四男である七郎惟輝が武田家に養子に行つて生まれた子です。武田寧は細川侯爵家の家職を務めていました。また妻、信の実家は木下といい、信の父は木下鞆村、兄は京都帝国大学初代総長の木下広次、姉の連れ合いは井上穀という家系でした。

村川堅太郎は明治四十年に東京・浅草で生まれ、三歳で雑司ヶ谷の家に引越し、成蹊中学校、第一高等学校を経て東京帝国大学に進学、西洋古代史を学びました。専攻はギリシャ・ローマ史です。父と同じく帝大（後に東京大学）で教鞭をとり、在任中に日本学士院会員になりました。私生活においては父から衣食衣主義を受け継ぎ、さすがに父と同じように新たに何度も家を建てるということはしませんでした。戦後すぐに相続し、それから四十五年、世の中が激変し地価が上がり続ける中、別荘地を含む三箇所を緑濃いままに維持してきました。これは家を建てるのに等しい努力だったという事は傍にいて理解するところです。もう一つ申し上げるべきは、目白台の庭を苔庭仕立てに造り変えたということで、普通なら植木屋さんに頼むところ

も自ら鋏や鋸を手にし、あるいは植木屋さんにも細かく指示を与えましたので、堅固から継承した土地とはいえ、今日に至る作庭は堅太郎によるものです。

一応、三人のプロフィールをご紹介した上で堅固の生涯について更に詳しく触れることにします。嘉納治五郎、細川侯爵家など、たいそうお世話になった方々とのこと、それと建てた家とのことも交えてお話しします。

村川家は代々肥後細川藩の藩士でした。特段身分が高いということはなく、先祖附によれば横目、御小姓などであったようです。堅固の祖父である村川舟水、この人は幕末の頃には村川勝左衛門という名でありましたが、舟水も御小姓でした。舟水には女の子しかいませんでしたので、三女の菊に養子を迎えました。【写真①】左下に読める、勝蔵という人です。しかし勝蔵は実質的な婚姻関係となつて間もなく、二十四歳の若さで急逝してしまい、それでも菊が



【写真①】

既に身ごもつたので明治八年に堅固が生まれました。しかも明治十年には西南の役で家が焼けて、それからは小さな家で

暮らし、その思い出が良くなかったことが後年、大きな家への憧れや別荘を建てるといふ家作りへの執心に繋がったと伝え聞いています。

ただ堅固は幼少より勉強は良くできたようで、明治二十一年に、できて間もない第五高等中学校に入学しました。明治二十四年には有名な教育家、柔道家である嘉納治五郎が校長として赴任され、嘉納治五郎の自伝『私の生涯と柔道』に当時は振り返った次のような文章があります。「第五高等中学校の気風は質朴で頼もしい」、それに続いて「当時は熊本というところは社会が単純であつたから、校長は常に学校のことにはのみ力を用いれば良く、当時の生徒と自分は存外に親しみが深い」とも書かれています。堅固の方でも嘉納治五郎が亡くなった時の追悼文集に、柔道、巴投げなども教わつたことがあると書いていますから、「存外に親しみが深い」といふ言葉は決して形式的な弁ではない、嘉納先生がそのような人間関係を結んで下さつたといふことだと思ひます。

続いて堅固にもう一人影響を与えたと思われるのが、皆さまご存じのラフカディオ・ハーン。嘉納治五郎が松江から招聘しました。昭和十二年に出た吉田千之氏の『龍南人物展望』では堅固をこのように紹介しています。「無類の勉強家で、五高時代は成績抜群、特待生の恩恵に浴してゐ

た、極く真面目な方で、奮つた逸話などは一寸見当らぬが、中略：龍南会雑誌委員として活躍し：中略：時々ヘルンに寄稿を依頼してゐた」。続いて、堅固はヘルンの自筆原稿を持つていたけれども東京に出てから紛失したともあります。そのような次第でヘルンの影響で堅固が西洋史を志したのではないかと推測されますし、実際、堅固が最初に手がけたのは東西交渉史で、江戸時代初期、日本に来たヨーロッパ人も研究対象でした。

さて、【写真②】の前列の真ん中、これが第五高等中学



【写真②】

校時代の堅固です。もう一人、見ていただきたいのは中の列左端の方で、赤星陸治さんとおっしゃいます。赤星さんは五高から東京帝国大学法学部に進学され、三菱に入社。最初は小岩井牧場に勤務、のちに今の三菱地所会社の社長になられ、東京丸の内の丸ビル

建設に当たられた方です。現在、東京都武蔵野市に成蹊大学がありますが、大正年間に、今の文京区目白台から歩ける距離にある池袋に、三菱の援助のもとに小学校、中学校ができたのがその発祥です。赤星さんのご長男の平馬さん、堅固の長男の堅太郎、この二人はともに成蹊中学校に通い、終生の友人でした。ですから親子二代にわたり同窓の友人関係にありましたし、後年の話ですが、成蹊中学の教育は堅太郎の生涯に大きな影響を及ぼしました。

さて堅固は第五高等中学校を卒業したのち東京帝国大学に進学しました。今日でも子供を遠方の大学に進ませることとは大変お金がかかりますが、堅固の場合、主なる働き手を失った家庭ですから、いったいどうして東京の大学に行けたのかと私がかねてより不思議に思っていました。このたびの展示にあたり、東京に出た堅固が郷里に残した母菊宛てに書いた手紙の読み下し文をつけて下さいました【末



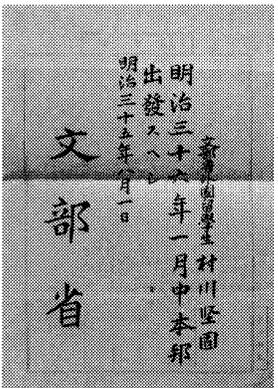
【写真③】

尾 参考書簡】。これは展示の中にありますからぜひお読み下さい。これによるとやはり堅固の生活は窮乏を極め、その中で嘉納治五郎先生

が金銭的援助をして下さったことがわかります。私は、今、文化財になった家に住んでいます、その家を成すまでに相当の窮乏と師からの援助があったことを知って大きな感動をおぼえました。堅固が大学を卒業したころ、東京に戻っていた嘉納先生は文部省で学務局長という立場におられ、堅固は短期間ですが嘉納先生の秘書を務めたことがありました。これも収入の道を与えて下さったのだらうと思います。こうして大学院を出て陸軍大学校に就職し、【写真③】のようにふさと結婚して間もなく堅固に転機が訪れます。

【写真④】の命令によって、ヨーロッパに三年間留学することになるのです。現在もこの時の留学生名簿が残っています。名簿は二冊あって、一冊には入れ違いで帰国した夏目漱石の名前も見ることができます。

こうして留学したわけですが、堅固にとつてやや方向違いになってしまったのは、文部省からギリシヤ史を研究する



【写真④】

るようにとの命を受けたことで、このため堅固は帰国後、ギリシヤを中心とした西洋古代史を担当することにになりました。最初に勉強を始

めたのはドイツのミュンヘンで、明治三十六年六月に同じ下宿の学生が撮ってくれたと裏書きのある写真も残っています。ミュンヘン滞在中に堅固に子供が生まれました。誰であつても日本からヨーロッパに渡れば生活の違いに目が向きますが、堅固の場合、子供が生まれたことでヨーロッパの子育てにより細やかな関心が向いたようです。堅固はヨーロッパの三年間に、百十通余りの手紙を東京に送っています。このうちの三分の一は見当たりませんが、残された手紙に当時のヨーロッパの様子、その暮らしに対する驚きが綴られていたいへん興味深いものです。但し、B5にも満たないようなレターペーパーとはいえず、裏表に細かな字でびっしり書かれ、読むのになかなか骨が折れます。

三年たつて堅固が帰国し、家族と一緒に住むようになった地は東京の浅草区今戸、隅田川の畔で、この家は細川家の別荘の離れです。長男の堅太郎はここで明治四十年に生まれました。堅固の趣味は釣りでした。この家は敷地から川に釣り糸を垂れることができましたから、堅固の趣味にとつては恰好でしたが、それだけにひとたび大水が出るとたいへんで、床上浸水に懲りて新しい住まいを考え始めたようです。

標題に「雑司ヶ谷音羽」とある江戸時代の切絵図をみますと、護国寺をはじめ、音羽通り、目白通りなど道の大枠

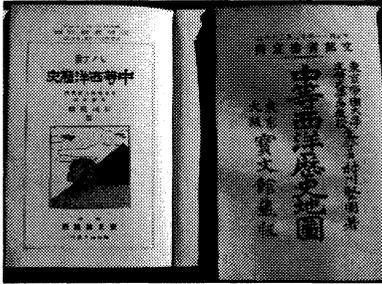


【写真⑤】

は今と変わりありません。南に流れている神田川、ここから神田上水が取り入れられています。目白通りから神田川にかけての南斜面は今でもうっそうとした斜面林が続き、東京離れた趣があります。かつて景勝の地で、ここには大名の下屋敷が続いていました。細川家の下屋敷もここにあり、明治に至つて、下屋敷が細川侯爵家の本邸になりました。この切絵図の中に鶴と亀と書かれた緑は侯爵邸門前の二本の松の老木のことです、これがあつたのでこの辺りは高田老松町という町名でした。熊本に馴染み深い方に宇野哲人、精一の二代にわたる学者がおられますが、精一さんも若い頃この一角にお住まいだったそうで、精一さんのみならず界限には熊本出身の人が大勢住んでいたそうです。堅固の場合は高田老松町からわずかばかり北に寄つた雑司ヶ谷町に家を構えました。妻ふさの義父である武田寧が細川侯爵家の家職を務め高田老松町に住んでいましたから、妻の実家近くと申せましよう。

【写真⑤】が明治四十三年から翌年にかけて建てられた村川の家の、できて間もない頃の写真です。写真の左半分は和風の住宅、右半分は西洋館です。そのうち大正九年には大谷石で蔵を建てましたが、てっぺんに凹凸があり、多くの方が西洋の城塞を思い起こさせるとおっしゃいます。このように和風の建物と西洋風の建物を合わせて建てることに堅固の建築に対する考え方が表れているように思いますし、特色といえるかと思えます。

【写真⑥】は明治四十一年に出た中等西洋歴史と中等西洋歴史地図という教科書で、著者は村川堅固です。旧制中学をお出になられた方が、堅固先生のご本を使いましたとおっしゃるのは、これを指すと思われまます。私の家には明



上【写真⑥】 下【写真⑦】

治三十五年から昭和三十年までの家計簿が残されており、古い頃のものには毛筆、縦書き、「覚え帳」とあって、書き手は堅固の母菊だと思われまます。明治四十一年からはノートにペンの横書きの今日の家計簿の体裁になり、こちらの書き手は堅固の妻ふさです。これらの家計簿によると当時の帝大教授の俸給は他に比べてたいへん高額でしたが、教科書の印税はこの俸給に伍して、というか俸給をしのいで高額でした。このような副収入があったことが家の建設や、後年の別荘建設を可能にしたと考えられます。

【写真⑦】は「我孫子天神山より安美湖の眺望」と但書がある古い絵はがきです。「安美湖」は手賀沼のことのようです。明治四十四年に嘉納治五郎が別荘を構えたのがまさにこの天神山でした。明治、大正期もこの眺めはさほど変わらなかつたと思いますが、今は沼の一部が埋め立てられて住宅街となり、その手前に幹線道路が通り、その両側に家電量販店やファミリーレストランが並んで風景は一変しました。かつて我孫子は関東きつての釣りの名所でもありました。この我孫子に最も早く別荘を持った一人が嘉納治五郎で、次いで大正三年に嘉納治五郎の甥にあたる柳宗悦が移り住み、続いて志賀直哉、武者小路実篤が移り住んで、我孫子はその頃、白樺派の拠点でした。嘉納先生が別荘を持たれた釣りの名所ということに惹かれたのでしよう、



【写真⑧】

堅固は大正六年から翌年にかけて別荘建設の土地を求めたのでした。といつてもすぐに建設にかかったわけではありませんでした。

【写真⑧】は大正七年

七月に撮影されています。中央が堅固・ふさ夫妻、右端が堅固の母の菊左端がふさの母の武田信

他は子供たち、長女、長男の堅太郎、次女、次男の正二の順で、当時の家族全員が揃っています。正装しているのが結婚式でもあったのかと家計簿を調べたところ、その四日後に堅固が横浜の港から船でアメリカに出発したという記載がありました。渡米を前にした記念撮影だと想像する次第です。まだ海を渡ることが大変な時代でした。

帰国した後、大正十年秋、堅固のもとに、水戸街道我孫子宿の本陣の離れが取り壊されるという話もたらされました。それを惜しんで移築したのが、堅固が手掛けた別荘建築の第一号でした。見た目はごく普通の和風建築ですが、中に入ると欄間や釘隠しがなかなか潇洒で、目白台の本宅

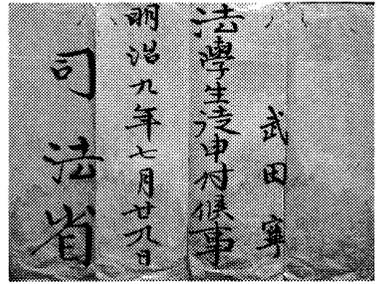


【写真⑨】

よりも洒落た雰囲気があります。我孫子の敷地内にはもう一棟、朝鮮風の新館と呼ばれている建物を建てました。新館建築の二年前の大正十四年、堅固は朝鮮に行っており、それは東京帝国大学が朝鮮の楽浪で行っていた発掘調査が資金不足になり、堅固が細川侯爵家に資金援助をお願いしたので視察のためということの

ようですが、その時に堅固は朝鮮の建物に大層惹かれ、それで朝鮮風の建物を建てたのだそうです。屋根の反り具合が朝鮮風といえばそうなのでしょうが、この建物の入口は引き戸ではなくドア、中に入ると床は寄木細工でベッドもあって、洋風の趣もあります。このように洋風を取り入れるところに堅固の建物への思いがうかがえます。もう一枚【写真⑨】でご覧いただくのは、神奈川県藤沢市鶴沼の別荘の門前の風景です。高い木は総て松です。これを見ても堅固が家には大きな木があることが大事だと言っていたことをおわかりいただけるでしょう。

次に堅固の義父である武田寧についてご紹介します



【写真⑩】

と、安政二年に生まれて明治四十四年に生涯を終えました。中島広足の孫にあたります。詳しいことはわかりませんが、【写真⑩】のように、明治九年に司法省の法学生徒を申しつけられたとの文書が残っています。

伺候しました。最初は当主・護成侯の叔父である長岡護美子爵にお仕えしたようで、当時受け取った手紙の宛先を見ると、日本橋浜町、浅草区今戸とあり、東京の中でも下町に住んでいたことがわかります。浅草区今戸は、堅固が留学から帰国後に今戸の細川侯爵家別荘の離れに住んだという、その場所です。ですから堅固が今戸に住んだのは、義理の父である寧の口利きがあつたからではないかと推測されます。

私は残念ながら武田寧に関わる文書を読むことができませんが、今戸からは隅田川を隔てた対岸、本所区徳川邸の徳川篤敬よりの手紙の他、沓々蟹や有斐学舎の創立の記録らしきものが残され、関心のある方には面白いかと思えます。その他、手紙の差出人には津田静一、高橋長秋、清浦奎吾、

元田永宇、池辺義象、大山巖などを見るができます。

さて、遅くとも明治三十一年には武田寧は小石川区高田老松町に移り住み、細川侯爵家本邸にお仕えしています。この住所に宛てられた明治三十七年の消印がある竹添進一郎からの手紙もあります。ちなみに嘉納治五郎は竹添進一郎の次女と結婚しています。この時の媒酌人は武田寧の義理の兄である木下広次です。嘉納治五郎の自伝によれば、嘉納治五郎に熊本の五高校長を勧め依頼したのは木下広次と、やはり武田寧の義兄であるところの井上毅だとあります。堅固と武田寧の娘、ふさの縁談はこのような人間関係の中で持ち上がり、嘉納治五郎が関与されたと想像しています。そういえば、弥富破摩雄によつて昭和八年に刊行された「中島広足全集」の「例言」



【写真⑪】

に「明治三十八年の頃に、細川侯爵家に仕へて居られた津田静一氏と、武田寧氏と、及び同郷の池邊義象氏との斡旋によつて、侯爵家のご補助を蒙り」という記述があります。それが丁度この手紙の頃のことです。

【写真⑪】は細川侯爵邸洋

館脇で撮影された家職たちです。父の堅太郎がそのように裏書しています。前列左から二番目が武田寧です。この西洋館は片山東熊の設計で、極めて立派な建物だったそうですが関東大震災で損傷し、今は残っていません。展示の中に細川侯爵にお供して箱根に行った武田寧の写真があります。その時かどうかわかりませんが、武田寧は侯爵のお供で箱根に行った時に倒れ、帰らぬ人になりました。

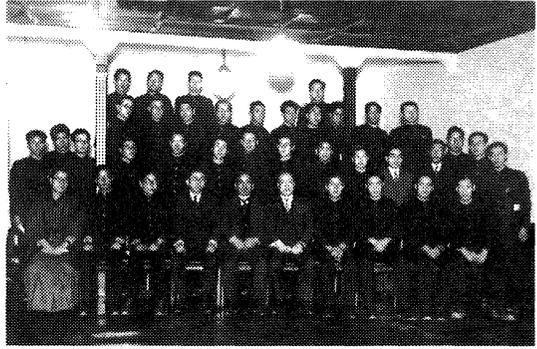
他に、村川菊、井上鶴（毅夫人）武田信（寧夫人）の三人のおばあさん達が並んだ写真も残っています。三人とも既に御主人は亡くなっている頃のもので、この方々はかなり長命でした。武田信は昭和十六年に亡くなり、遺書に「書類はおすぐりのうへ 村川家へ保存願います」とあり、その中に中島広足の「玉の霰窓の小篠」「檀園文集」「広足翁詠草」「檀園集（花のしたふし／しのすだれ）」の書名が挙げられています。ただし、村川家に今ある軸物については、先の家計簿に広足翁の軸物を買ったとの記載があるので、武田からきたものと、堅固が買ったものとの両方があると思われるが仔細は不明です。

昭和十六年に太平洋戦争が始まり、堅固は終戦後、疎開先で亡くなりました。寧と信の娘、堅固の妻であるふさも終戦から十年後に亡くなり、「村川家へ保存願います」という武田信の遺言は実質的には堅太郎に託されることになり

ました。

堅太郎については残された著作、庭の話を致しますが、先程も申しましたように私は歴史を勉強したわけではありません。私が父の著作についてお話をすることを父は好まない、これは明らかですののでいささか困るのですが、幸い、この四月に我孫子で、父のあとに東大の西洋古代史の研究室を継がれました伊藤貞夫先生が村川堅太郎の仕事について詳細なお話をしてくださいましたので、それをお伝えすることにいたします。

言うまでもないことですが、西洋史というのは西洋の後追いで始めた学問で、日本に西洋史をもたらしたのはお雇い外国人教師のルートウィッヒ・リースでした。堅固もリースの下で勉強しましたので、リースが亡くなった後、『史学雑誌』に追悼文を寄せています。ただ堅固の時代、西洋史は到底今日のレベルではなかったもので、堅固がしたことには、東大の図書館に西洋古代史関係の文献、専門的な雑誌や資料を整備することだった、それが堅固先生の最大の業績だったと伊藤先生は述べておられました。続いて伊藤先生は、堅太郎先生は堅固先生が整備された文献をひたすら読むところからスタートされたと話されました。親子ですから一世代、約三十年の違いがありますが、この間にスタートの位置が前進した、あるいは高くなったということ



【写真⑫】

でしよう。また伊藤先生は、「歴史というの文字資料を正確に読み、解釈し、狭い論点に即して時代の像を明らかにしていく非常に地道な学問である」と述べられたのに続き、村川堅太郎の研究姿勢として次の二点挙げられました。その最初は「文献を正確に読み、解釈し、実証するという研究を日本の西洋古代史に初めて導入し、且つそれを世界的水準まで高めた」という点。もう一つは「どんな資料でもそれを取り上げる立場、意図があり、また時代の像に対する自分の考えがある、つまりそれが歴史観というものであるけれども、歴史観を持つことの重要性を身を以て教えられた。それが堅太郎先生の偉大なところだ」という点です。以上を前置きにして話を進めます。

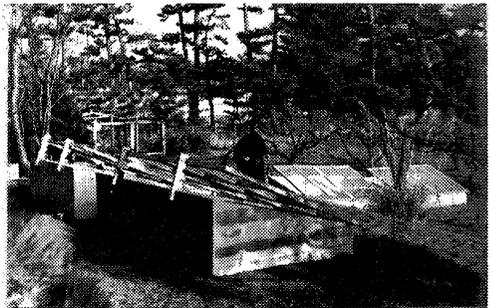
その上で【写真⑫】をご覧下さい。前列の左から五番目が堅固、二列目の右から三番目、背広を着ているのが堅太

郎。昭和九年三月の写真です。堅固は昭和十年に定年退官になりました。堅太郎は昭和五年に卒業。はつきりしません、この時は助手でしょうか。これは親子が公の立場で映っている唯一の写真ではないかと思われれます。堅固の右側は近世イギリス史を専門とされる今井登志喜先生でいらっしゃるようですが、専門分野は違っても堅太郎は今井先生の学問の気風に大きな影響を受けたといわれており、また今井先生の堅太郎に対する信頼が大変厚かったので、昭和十年に堅固が定年になったのち、まだ非常勤講師であった堅太郎が西洋古代史の講義と演習を受け持つことになった、非常勤講師が演習を受け持つのは、今は勿論、当時としても異例中の異例のこと、先般、伊藤先生はこのようにお話しされました。堅太郎が早くから頭角を現したのは間違いのないことのように、いささか脱線しますが、堅太郎が亡くなった後、穂積重行さん（東京教育大学教授を経て大東文化大学学長）が、「向陵」（一九九二年四月号）に「村川堅太郎先生」と題した追悼文を寄せて下さり、「堅固先生が学界に遺した唯一の功績は堅太郎君を生んだことだ」という悪い冗談がささやかかれていたらしいと書いておられました。もつともらしく聞こえてしまう話です。

さて先程、堅固の五高時代の話の中で、堅太郎が大正時代、池袋にあった成蹊中学に通い、そのことが堅太郎に大

きな影響を及ぼしたと申し上げました。中学時代、堅太郎は絵や音楽に親しみ、家計簿にも「絵の道具」という出費項目が頻頻と出てきますし、セザンヌに傾倒して絵ばかり描いていて、村川君はこのままでは上の学校に上がれないよと言われていたそうです。もちろん、無事上の学校に上がりましたし、その後のことは先程申し上げた通りです。

堅太郎は昭和九年に結婚し、昭和十二年の年末から鵠沼別荘で暮らすようになりました。妻がピアノを弾く人でしたので、翌年に中古のピアノを買い、自分でも独学でピアノを弾くようになりました。ベートーヴェンのピアノソナタ「熱情」などの難曲も目通しだけはしたようですし、スコアもたくさん残っています。昭和十年代前半、鵠沼では犬を飼い始めました。名はアルテミス。アルテミスが死んだあと飼った犬の名はローランといました。また、シクラメンの栽培もはじめ、小さな株から育てたようです。シクラメンは戦後、後々まで贈答用の高級品でしたから、この頃、シクラメンは極めて珍しい花だったのではないでしょうか。堅太郎が後に書いた随筆に「何事にも凝り性な私は、花を作る以上は一年中絶対に花を絶やさぬようにと心懸け、」という文章がありますが、ピアノや花を通じ、凝り性で夢中になって打ち込む、堅太郎のこのような性格をご理解いただけるかと思えます。



【写真⑬】

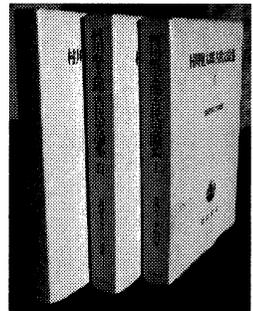
【写真⑬】も鵠沼の写真で、松林と砂地の、いかにも鵠沼らしい風景です。そこにフレイムを作りました。フレイムというのは簡易な温室で、この中でシクラメンを育て、一年中、花を絶やさぬようにしたわけです。しかしこのような生活は長くは続きませんでした。先程の随筆のすぐ続きに、「大陸での戦争はいつ果てる見込みもなかった。」きつと日本は食糧で行きづまると考えて草花いじりをやめて畑作に転向した」とあります。小麦を作り、おしるしばかりではあるが供出もしたとも書いています。鵠沼は土地が砂地ですから生育に向かないものが多いのですが、サツマイモや桃は良くできます。甘いものが貴重だった戦争中、ご近所に桃を配って、大変喜ばれたそうで、堅太郎が亡くなった後、「当時小学生だった私にとって、先生からいただいた桃は文字通り、甘い思い出でした」というお便りをいただいたこともありました。

しかし何であれ作物を収穫するまでには、その時々には必

要な手を抜くことができない作業を天候を見計らいつつ行わなければなりません。しかし堅太郎の本業は農業ではありませんが、明日の授業の準備も先送りにはできない。このままでは学問と農耕、虻蜂取らずになるのではないかと、そんな悩みも随筆に綴られています。そうしている間にも戦局は悪化して終戦を迎え、翌年、父堅固が疎開先の兵庫県で亡くなりました。堅太郎は堅固から雑司が谷の本宅、我孫子、鶴沼の維持を託されましたが、敗戦直後の混乱の中、維持は難しいと答えて父親を嘆かせたそうです。堅太郎はそれを一生悔やみ続けましたが、実際のところ、相続税があり、他に財産税、田切り替えがあり、父を失った堅太郎の戦後は、当人の言うところの「絶対的に金の無いことの憂鬱」からの出発でした。

西洋史研究に難しさが付きまとった戦中、学問と農耕の両立に腐心した戦中戦後、堅太郎を貫いていたのは学問への執着心で、農業を体験的に理解しつつ、一方で学問的考察を進め、それを昭和二十四年に「羅馬大土地所有制」という大きな論文に仕上げて発表しました。

これを含む論文は『村川堅太郎古代史論集』全三冊としてまとめられ、【写真⑭】のように昭和六十二年に岩波書店から出版されました。【写真⑮】は『古典古代遊記』という随筆集です。堅太郎が亡くなった後、先程ご紹介した



伊藤貞夫先生と、ローマ史専攻の長谷川博隆先生が編集に当たられて平成五年に岩波書店から出版されました。随筆の内容としては、専門分野の論文の種に



【写真⑮】なるような事柄から庭のことで、様々な思い出などを含んでおり、お心ある方にはぜひ読んでいただきたい

と思います。古代史論集とこの随筆集が堅太郎の公私を代表するとも言えますが、順を追ってもう少しご紹介しましょう。昭和三十四年には日本エッセイストクラブ賞をいただいた「地中海からの手紙」があります。戦後十年、もはや戦後ではないといわれるようになり、昭和三十一年に国費留学が再開され、堅太郎はその第一期生として名乗りを上げ、昭和三十一、三十二年にヨーロッパからアメリカに渡り研究と視察をしてきました。その最初の頃の手紙をまとめた本です。

次の二冊も比較的阅读しやすい本なので、お読みになられた方も多いかと思えます。中央公論社から出た『世界の歴史』は文庫にもなりました。『オリンピア』は昭和三十九

年の東京オリンピックの前年に出了ました。日本経済がオリンピックを目指し高度成長を始め、その頃から東京は勿論日本中で新しい道路が作られるようになりました。東京に多くの人が集まるようになり、鶴沼や我孫子もかつての田園から住宅地へと変化を始め、地価が上がりが固定資産税が上がって、別荘として維持することが難しくなりました。

そうした中で別荘の維持が可能であったのは山川出版社の世界史教科書の印税があったからでした。村川堅太郎という名を世界史の教科書執筆者として記憶しておられる方、執筆者は知らないけれど教科書は使ったとおっしゃる方、いずれにしてもこの教科書を使われた方はたくさんおられます。しかし現実問題として固定資産税はある時期から印税をしのぐようになりました。それでも堅太郎が終世、別荘を持ち続けることができたのは、藤沢市が早くから保存樹林や、「緑の広場」という借り上げ公園的な施策を立ち



【写真⑬】

上げ、これによって固定資産税がかなり減免されたからです。鶴沼の原風景という評価を得て鶴沼松が岡公園として残って

いるのです。

【写真⑭】は文京区目白台の庭の写真です。堅太郎はこの角度で庭を眺めることを好みました。庭作りというと、植木屋さんの仕事のようですが、堅太郎は鶴沼で小麦作りの農作業をしたくらいですから小兵にもかかわらず腕は太く、剪定も、脚立に上って手の届く相当の太い枝まで自分でしましたし、植木屋さんにも細かな指示を与えました。新しい策を思いついては皆の植え替えをしたりと、庭は堅太郎の作品だったと申して差支えないでしょう。私は父が庭ばかりしていると子供のころから半ば呆れていましたが、今になってみると、庭仕事をしながら想を練ったり、考えをまとめたりにしていた、庭はそういう場だったのでないかと思ひあたっています。

先にお話ししたものの他に、堅太郎が戦中に鶴沼で翻訳を手掛け、戦後に出版された本をいくつか紹介しましょう。これらは紙質が悪く、茶色く変色しており、戦後の余裕が無い事情を偲ばせます。「エリュツトラ海案内記」はギリシャだけではなくインド洋に至るまでの範囲が扱われています。「女の議会」はアリストファネスの喜劇ですから、今日なら西洋古典学の方々が扱われる分野でしょう。なぜこれらを紹介するかと云いますと、堅太郎の出発点がまだ西洋古代史が未分化な頃だったからとも言えますが、非

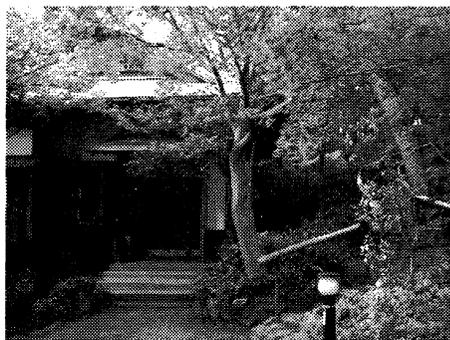
常に広い守備範囲を持っていたことを知っていたが、
かっただからです。

そういう堅太郎が生前危惧していたことは、今は研究が顕微鏡的になって来たということでした。顕微鏡的というのは、顕微鏡を覗くとその中は細かいところまで見えるけれど他は真つ暗で何も見えないという意味で、この状態を大変憂っていました。その気持ちを「地球的視覚の必要」という短い文にまとめ、短期間に業績を上げなければならぬ実情に理解を示しつつも「世界史の全体を絶えず念頭におき、人間性についての高次元の価値判断をもつこと」と「地球の外に出て人工衛星の上から地球を眺めて、自分の研究対象を位置づけること」を望みたいと書いています。この「地球的視覚の必要」も『古典古代遊記』に収録されています。またそれを自ら実践すべく、八十八歳までに「古典古代の市民について」と題してギリシャ・ローマの人間を日本人の立場から一つの人間類型としてまとめる志を持っていました。これは果たせない結果となりましたが、執筆構想のメモを『ギリシャ・ローマの盛衰』の後書きに長谷川博隆先生が紹介して下さいました。その構想の中に友愛という問題があり、ギリシャ・ローマの場合と中国の孝を対比することを考えていました。これを古代史の会という研究会で発表したのが平成三年十一月。その一月



【写真⑬】

以上、村川堅太郎の一生を振り返ってきました。その間、昭和十六年に「おすぐりのうへ 村川家へ保存願います」と託された中島広足資料は長い間、お蔵入りを続けてきました。そうではありま



【写真⑰】

半後に肺炎で帰らぬ人になりました。
冒頭父親譲りの住食衣主義により【写真⑰】【写真⑱】のように我孫子、鶺鴒の別荘地を緑濃いまま維持し、公園や指定文化財として残っていると申し上げましたが、最後の最後まで現役の学者で、研究者第一だったため、他を考える余裕がなかったという面もあると思っています。

すが、堅太郎はある時期に、蔵に残された品々に説明書きを施しておいでくれました。といつても丁寧に書かれものではなく、自分の心覚えのような感じもありますが、ともかく説明を残してくれた、しかもそのみならず、「蔵にはなかなか面白いものがある」とも申しております。歴史家が「面白いものがある」と言ったことが、私が古い品々を残してきた、また後世に伝えていきたいと思つてゐることの拠り所となっています。しかし保存することと、それらが日の目を浴びるといふことは別の問題です。今回、中島広足資料が熊本に来ることになったのは一口に言うると幸運でしたが、幸運は人が招くものだという言い方をすることもあります。

最後に一枚の新聞記事を紹介したいと思います。まだ堅太郎が存命の時のことですが、新聞を読みながら突然に、「ああ、この人とゆつくり酒を飲みながら話をしたものだ」と言つたことがあります。この人というのは、その記事（一九九〇年四月十一日、毎日新聞「ひと」欄）に紹介されていた、人事院総裁になられた弥富啓之助さん、中島広足の研究者である弥富破摩雄先生のご長男です。今に残るその切り抜きには、啓之助氏のお仕事ぶりではなく、記事のおしまいの方の「飲んで議論するのが好き」といふところにわざわざ傍線が引いてあります。父もまた飲んで

議論するのが好きでありました。啓之助氏とお酒を酌み交わしつつ、破摩雄先生が残されたものをどのようにされたのかを伺いたかつたのでしよう。しかし人事院総裁という要職にあつては忙しくて当面お目にかかることもできないだろうからいずれ……と言つてゐるうちに堅太郎は他界しました。堅太郎がこの新聞記事を大事に取り置いていたことを私はよく知つていましたが、相続の様々な問題に追われてゐるうちに年月が経ち、ハツと気がついたのは新聞に啓之助さんの訃報を見た時でした。中島広足資料に関わる大切な方がいなくなつてしまわれたと思つて愕然としましたが、気を取り直し、落ち着かれた頃を見計らい奥様にお手紙を差し上げ、資料についてお尋ねしました。そうしてご紹介いただいたのが、これからお話をされる、ご次男の頼彦さんです。

その翌年、平成十四年ですが、熊本にあった村川の墓地がお寺のご都合で整理されることになりました。手続きのために熊本に来た際、この機を逃してはと思つて市役所に伺い、何やら熊本関係の古ものがたくさんあるとお話しました。大変思いがけないことに、熊本市の市史編纂室の御一行がその翌週上京されるとのこと。何分、細川家の、現在の永青文庫は同じ町内ですから、永青文庫訪問のあと我が家にお寄り下さる運びになり、そうして村川家資料を

熊本でマイクロフィルム撮影して保存しようとお話をいただいたのでした。その後も多くの方のご尽力をいただき、今回の展示に至りました。皆様深く感謝し、話を終えたいと思います。ご清聴、有難うございました。

【参考書簡】

嘉納治五郎等の援助がうかがわれる書簡の一例。堅固卒業の前身のもの（文学館で展示した書簡とは異なります。また、適宜、濁点と句読点を補っています）。

拝啓仕候。段々寒気に相成申候処

いよく御きげん被為在奉恐賀候。二に

私事相かわらず元氣にてべんきやう罷

在候間、乍憚御安心被下度候。御送の金員

十三円、外、徳永義九円、たしかに拝受仕候。

猶、てる様御しんせつに感荷仕候。御教指之通、

さつそく御礼申上べく候。物価高直に

付ては御同様、中々めいわくの次第に御座候。

それにつき、前便に唯今考さつ中の旨申上候

に付、御考へも御申越被下候処通、来年の

卒業試験は中々大事に御座候間、出来る

だけはりこむ積に御座候。唯今考中のことは、

外に教見に行く如きことには之なく、すきぐに氣ずいに致す仕事にて、来年卒業後も

さつそくくひぶちにこまらぬやうの仕事に御座候得ども、唯今相談中にて、できる事やら

分り申さず候。嘉納先生もすぐにかへられ候

ひしも、いまだ御話し不仕候。今月までは

世話にならずして取つゞき申候。先日は

存じ懸なく、史学会より金二円もらひ申候間

去ル十六日十七日両日、文科大学筑波山の遠足

会にまゐり申候。生徒の出金は壹円五十銭

にて、外に、先生方より五十円許の寄ふ有之候。

祖母様次第に御よりはりにてさぞぐ御めいわく

の御事と察し上申候。お清様つゞきて

かせいにまゐられ候由、御仕合に御座候。

先はこゝに筆をとゞめ申候。餘は猶後便にて

申述べ候。謹言

十月廿二日

堅固

母上様

御ひざもと